

SAO裏企画に選ばれた少女達

「あなたの顔なんて、二度に見たくないわ……」

「私は貴方達の言いなりになんてならない」

心と身体を操られ

「……………おはようございます、寂しいところはありますか……あかさん……………」

植え付けられる強制絶頂

「あ………おは………い………」

「ん………ん………い………ん………い………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………」

無垢なカラダは快樂漬けにどっぷりハマリ

「ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………ん………」

大切な仲間達が

「どうか……おち………無しじゃ生きられない……」

音声付きサウンドノベル

肉棒中毒へと堕ちて行く…

Minority hearts7

～催眠寝取られ～

CG基本33枚

Hシーン26本



「君の名前は？」

「……………シリカ……です」

「本名は？」

「……………綾野……珪……子……です」

虚ろな瞳の少女が、男の言葉に従順な答えを返す。

「SAOはごつやつて始めたんだい？」

「……………ナーヴ……ザア……お父さん……に……」

「買って……もらいました……………」

「なるほど。それじゃあ、」

「大好きなお父さんには申し訳ないけど、スカートをめくってみようか」

「常識的な感覚を持つ女の子ならば、嫌悪を抱くような、ありえない命令。」

しかし——

「……………はい……………」

部屋に集まった男達が目を見張る中、少女はゆつくりと、

しかし躊躇いもなく、自らのスカートをまくり上げる。

微かな衣擦れの音を響かせ、

スカートに隠されていた白い布地が薄暗い照明の中に浮かび上がった。

スス…

♡♡

「何といけない子だ……これは罰を与えなくてははいけませんな」

ペンダントを握る男が、集まった客人達に形式ばかりの同意を求める。息を呑む気配が周囲の男達の間を広かった。

「罰として装備を解除しなさい。良いね？」

「……………はい」

少女は頷き、胸のプレートに手をかけた。そのまま装甲の留め金を外し、紅の衣装さえもゆるゆると脱いで行く。

これもこのサービスなのだろう。

SAOに限らずゲーム全般としてボタン一つで着脱が可能と聞いているが、今この場においては、より現実的なストリップが可能であるらしい。

脱ぎ捨てられた外套が柔らかい衣擦れの音を室内に響かせる。

そして男達の前に、下着だけを残した少女のしなやかな身体が現れた。

「そついえばシリカちゃんは経験値が欲しいんだっかね？」
未だ虚ろに佇む少女に、騎士服の中年男が尋ねる。
もちろん返答を期待してのことではないだろう。

「……経……験……値……」

「そつ、経験値だ。」

早く強くなって、キリト君の隣に立ちたいだろう？」

「……はい」

「シリカちゃんのためにお友達がたくさん来てくれたから、
彼らから好きなように、”経験値”をもらおうと良い」

「……はい」

まどろみながら頷くその耳に、男がいくつかの言葉を囁く。

「それじゃあ……好きな人のためにいっぱいレベリングしてみようか……」
再び掲げられたペンダントから眩い光が発せられ——



「ん……ちゅ……はあ……あ……ん……っ……くちゅ……」

「……は……ん……ちゅ……あは……ふ……んちゅ……」

「んぶ……ん……は……あ……」

「精液……んちゅ……はあ……精液……ください……」

「ペロッ」

「ペロッ
ペロッ」

「ニギッ」

「……ふふ……そんなに私の精液が飲みたいかね？」

「……はい……んぶ……ちゅ……」

「欲しい……です……はあ……精液……ください……」

「おっっっ……おっっっ……おっ」

「んっっんっくっんっんっん」

ビュッ

ドロ

ポ

ポロッ

ポ

ポロッ

ギョレ

キョッレレ

ポッポッ

ドロッ

舌で自らの唇をふき取り、ぶちまけられた恵みを淡々と飲み込んで行く。

「ふう……満足したかね？」

「はい……ありがとうございます……ご褒美でした……」

ビュッ



「全くもう、「これじゃどの程度の戦力か」

「わからないじゃないですか。」

「最初からフル勃起させておいてください！」

苛立ち紛れに竿を握り締めると、

団員の口から苦しみとも恍惚ともいえないうめき声が漏れた。

「急いでるのに……」

「これじゃ今日中に終わらないじゃないですか！」

「ん……」

「これではいつまで経っても確認が終わりません」

「逃げないでください。」

キョ

ブルン

ブルン
ズレ
ズレ

「ア、アスナ様、それは……」

「んあ……ちゅ……？ はあ……見ればわかる……れしよ……んう……」

「おちんぼ、が……あ……最後まりえちゃん……」

「んう……硬くにやる……よつにい……んちゅ……あむ……」

「うお……っ」

「んぶ……うごかりやいで……えろ……くらみゃい……はあ……」

「ほりゃ……早く……んちゅ……おちんぼしよーロシキリユ……」

「えろお……出してみれ、くらみゃい……」

「ハ……」

「……ア、アスナ様……それ以上は……」

「ひよんなんで……フリョアポスト……じゆるう……」

「たひゃかえまひゅかっ……っあむっ」

ブルン

キョ

へっへっ

ス





「んう……じゆる……はあ……んう……んぐ……」

はあ……ペろ……んく……っけほ……

やれば……出来るじゃないですか……

「ア、アスナ様……」

ドロー

ソードスキル発動後で神経がまだ敏感になっているのだろう。
うろたえる団員の腰に手を回し、無理やり引き寄せる。

ブル
ズ

ハ……♡

ハハハ

キ

ブルン

「んむ……らって……じゆる……まら、んあに……はあ……」

「おちんぼそーりよ……れろ……おっキー……」

「ほら、次の人、早くズボン脱いでおちんぽを出してください。
次の次の人もあらかじめチンポ出して待ってなさい」

いつの間にか列を作っていた部下に、副団長としての威厳をもって命じる。

「え……らと、本当にその……これ、突っ込んでも良いんですか？」

「良いに決まってるじゃないですか。早くしてください」

キリーッ

ブル
ス

ビュッ
ビュッ

ハハ
ハハ

キッ

ブルン

「んふ……えろ……はあ……ちゅっ……あは……えろお……」



「最強ギルドの幹部さんが、

護衛も付けずにこんな時間に二人で歩いて大丈夫なのか？」

「はは、あれはアスナ君が特別なだけなんだよ。

私のような冴えないおっさんは、

妬みを買えるほどの人気さえないから何も問題はないのさ」

モッ

向かいに座る黒衣の少年の問いに、

少女の隣に座る中年の男が笑いながら禿げ上がったおでこを叩いてみせた。

「私よりも君達」そんなもの宿で食事なんかして大丈夫なのかい？

攻略組のトッププレイヤーとポリウムゾーンのアイドルが

夜のレストランでデートだなんて、明日の新聞が賑やかになるね」

血盟騎士団攻略副担当の男に視線を振られ、

シリカはあわてて背筋を伸ばす。

ニコッ

「……って、別にデートといっわけでは……」

「っ……あ……はあ……」

熱にうなされたような艶かしい吐息が、少女の桜色の唇から漏れた。

「ん……あ……はあ……ん……」

モッ♡

あ♡

あ♡

はあ♡

はあ♡

小さな身体を蝕む、官能的な甘い毒。

少女の異変に気付かないのか、同じテーブルでは、

既知の仲であるプレイヤー二人の何気ない談笑を続けている。



「まさかシリカを血盟騎士団に勧誘しようってんじゃないだろうな」

グッ

「……え？……あ……私が、何か……？」

キュン
キュン

ツツ

「シリカちゃんが血盟騎士団に入ってくれたら、

うちの男達も頑張ってくれるんじゃないかなって話をしてたんだよ」

モ

ニコッ

「えあち……わたしは……別に、血盟騎士団に

入りたいというわけでは……その……ないです……」

ハッ





グハッ♡

グハッ♡

「はあ……はあ……あ……はあ
「はあ……はあ……あ……はあ
「はあ……はあ……あ……はあ

「……ん……っ」

ジワ…♡

キュン♡
キュン♡

「あざっやだ……こんなところだ」

「はあ……ん……あ……」

ローターに煽られた乳首から生まれる情欲を逃がすかのように、
熱い吐息を吐き出す。

「はあ……はあ……あ……ん……」

「はあ……はあ……あ……ん……」

耐えることの出来ない不規則な刺激がガチガチに尖った乳首と少女の肉真珠を強烈に叩き、颯り、少女の快樂中枢を揺さぶる度に淫らな声が漏れる。

「んあ……つはあ……んう……あつ……
ああん……や……あ……
んあ……んう……あつ……
んあ……んう……あつ……
んあ……んう……あつ……
んあ……んう……あつ……

「はあ……つあ、はあ……ああ……んっ、ああ……と
はあ……つあ、はあ……ああ……んっ、ああ……と
はあ……つあ、はあ……ああ……んっ、ああ……と

「あ……つはあ……んあ……あはあ……
あ……つはあ……んあ……あはあ……
あ……つはあ……んあ……あはあ……

トロ……ム
ヴガヴガ

もじもじと膝をすりあわせ、ぐりぐりと恥部を弄り回し、より強い快樂を求めぬ。

「ふあ……ああ……はあ……あ……ああ……んふ……ああ……
ふあ……ああ……はあ……あ……ああ……んふ……ああ……
ふあ……ああ……はあ……あ……ああ……んふ……ああ……



許容外の快楽電流が暴走し、神経とその四肢を痙攣させる。

染みどころでは済まされないほどに溢れた愛液は椅子を濡れ落ち、

この世界には存在しない排泄行為のように

レストランの床に水たまりを作っていた。

あはあ

は...あうう

あはあ...あうう...あうう...んう

あはあ...あうう...んう

ガハハハ

んう

キニニ
キニニ

ポタポタ

プン
ガガガガ

ハハハ

ハハハ

ハハハ

はあ

ハ

ビク

ビク

ウイウイ

トロ

ウガウガ



「シリカくんは現実世界でも自慰を嗜んでいたのかね？」

「そんなこと……**おじ**あ……クラスの子から……はあ……**「こ」**……

触ると……気持ちいいって教えてもらっ……て……あん……
少しだけ……ですよお……」

「ほっほ、そんなに股を揺らして……」

シリカくんは我々を誘っているのかね？」

「だって……あん……おまんこ、見えた方が……
おいさんたちも……オナニー、しやすいですよね？
パーティープレイは……助け合いが、基本……なんですよお……」



「えへへ…経験値…こんなに…いっぱい…」

「はあ…嬉しいですう…」

「でもまだ…イけますよね…もっともっと…」

「はあ…経験値…んふ…もらっちゃいますよお…」

「もちろん、引き受けたからには最後まで付き合おうではないか」

「シリカくんは心行くまで、レベリングに励みたまえ」

「あん…ありがとう…」

「ニギハヒますう…えへへ…」

「オナニー…はあ…オナニー大好きですう…」

「あ…見え…ますか？」

「はあ…シリカの…エロまんこ…ちゃんと見えますか？」

「オナニー…はあ…オナニー大好きですう…」

「はあ…オナニー…はあ…オナニー大好きですう…」

「はあ…オナニー…はあ…オナニー大好きですう…」

「はあ…オナニー…はあ…オナニー大好きですう…」

「はあ…オナニー…はあ…オナニー大好きですう…」

「はあ…オナニー…はあ…オナニー大好きですう…」

「はあ…オナニー…はあ…オナニー大好きですう…」

「はあ…オナニー…はあ…オナニー大好きですう…」

「はあ…オナニー…はあ…オナニー大好きですう…」





「今まではランスとか盾とかやっていたので肉便器としては不慣れなところもありますが……」
「その……精液いっぱい流しかけて、生きていられることを実感させていただけると嬉しいです」

achi
250,000 cd

「オーションに参加してくれてありがとうございます、シリカです。
私のお父さんみたいに、いっぱい甘えさせてくれるおじさん、お待ちしています」
「サ、サチです……助けていただけありがとうございます」

ca
000 cd

グリ

グリ

「こんばんわ、アスナです。現実世界では受験勉強ばかりです……い退屈してました。
髪のあるセックスに憧れてますので、私の処女を奪って大人にしてくれる人、落れをお願します」

Asuna
9,850,00

「どうもーリズベットです。牛コキ、パイゾリフエラから蒸服までなんでもオッケーです。
おチンポのメンテナンスなら是非、お質と実績のリズベット武器店をよろしくお願します」

3: Lisbeth
6,650,00

グリ

3: Lisbeth
6,650,000

「一番の…アスナ君と言ったかね。素晴らしい乳房をお持ちのようだが、感度は高いほうなのかね？」

「はい。ブラジャーを着けてなかった頃は……体操着と乳首が擦れるのが気持ち良くて……ちよと困っちゃうくらいでしたよ」

「体育の授業中に、ちよとエッチな気分になってたりして……」

「はあ……今も、おじ様達に見られて……おっぱいの失っば、硬くなっています……」

「それではさぞ胸も疼いじかたないでしょうな」

「はい……乳首もクリトリスも、もっかがちなんです……早く私を」

「落れしてください……おじ様の大きな手で、おっぱい揉みしだいで」

「勃起乳首、舐め回して欲しいんです……」

Sachi
5,250,000 Gd

「なんと、こんなお若いお嬢さんに我慢をさせるわけにはいきませんな。1番に400万！」



「貴重な初めてを他の男に乱暴に扱われては可哀想だ。」
「一番「Lisbeth」だ。」

Sachi
5,250,000 Cd

2: Illica
150,000 Cd

3: Lisbeth
6,650,000 Cd

おじさん達にエッチな目で見られて……
恥ずかしくて……
興奮して……

「……はあ……見えませんか？
シリカのココ……
もう……こんな……
濡れちゃってます……」

「セックスについては……
学校の授業と、あと……
女の子向けの、ちよつとエッチな本も読んでました……
女の子の……おまんこに入れるんですよね……」





「あんっ……あ……今日から、シリカはあ……」

「主人様の……あん、おちんぽ奴隷です……」

「……あ……ん……そ……も……ど……ち……「ニ」を「リ」にして……あ……あんっ……はあ……ああ……」

「……あ……はあ……んふ……あんっ、あ……あ……あ……ああす……」

「主人様の勃起ちんぽ……シリカの……っあん、おまんこ……いっぱいですう……」

「……あ……はあ……あ……あ……おじさん……「れ」……「ま」……「く」……「え」持ちイイ……です……」

「……あ……ん……はあ……ん……」

「……あ……ん……はあ……ん……」

「……あ……ん……はあ……ん……」

「……あ……ん……はあ……ん……」

「……あ……ん……はあ……ん……」

ピトッ

ゴッポッ
ゴッポッ



あんな〜あんな〜あんな〜
「これが〜っあん〜これが〜セックズなんですね〜っ〜あんの〜」
「いかがですか〜はあ〜わたしの、処女まん〜」
「あんの〜」

「あんの〜はあ〜あ〜っ〜ふ〜んふ〜」
「あんの〜はあ〜すっぴん〜おじ様のちんぽが〜」
「あんの〜あ〜グーグー〜するの〜が〜わかります〜」

「あんの〜あんの〜あんの〜」
「あんの〜あんの〜あんの〜」
「あんの〜あんの〜あんの〜」

ズン
ズン
ズン

ポッポッ
ポッポッ
ポッポッ

「こちらじゃありません。」

「温かい飲み物はいかがでしょう？」

「ハキハキとした明るい声。」

「最高の笑顔をもって、シリカはお客様を出迎えた。」

「見せ付けるようにして大股を開き、ウェイトレスらしくその商品価値をアピールする。」

「当店自慢の、絞リたて生ロリラガジュースです。」

「頑張って作りますので是非是非美味ください。」

「ああ、やっぱりシリカなんだ。メールを見たときは少し驚いたけど、ほ、本当にウェイトレスをやっていたんだね……デブ……」

「えへへ、ありがと、つなぎますお客様。」

「えと、こちらの……おまんこのパイプにスイッチがありますので、そちらをONにしてください。」



「ト回……」



機械的な振動音と共に、シリカの股間に挿入されたバイブが動き出す。
男性器を模し、なおかつ人間では再現不可能な高速振動。

バイブレーターに混じる嬌声。
くもった水音と共に、少女の意外に肉付きの良い腰と尻が跳ねる。

「あつ……は……あ……んう……はあ……お……ん……」

「ん……あ……はあ……あん……あ……」

「はあ……あ……」

「はあ……あん……ダメですよ……」

「そんな……あ……お顔を、近づけられたら……」

「おまんこ汁……お客様に……はあ……かかっちゃいますっ」



「イクっ……イクっ……」

丸いおとがいを反らし、四肢を痙攣させ、ウェイトレスの少女が快感の頂を仰ぐ。

控えめな雨音と共にシリカの恥部から透明な液体が噴出し、同時に男の赤黒い鈴口から白濁液がぶっかけられた。

「はあ……はあ……はあ……あ……」

「はあ……はあ……はあ……あ……」

悦楽の余韻を熱い呼吸に乗せて吐き出す。

「はあ……はあ……あ……ん……あ……あれ……」

プジャ

グイグ

ジ

トロ

程よい疲れに浸るシリカの前で、客の男は未だ空のグラスを見つめていた。ところやら恥部から噴出したシユースは、グラスに入ることなくお客様の顔を濡らす結果をもたらしてしまったらしい。



涎を垂らしてよがり狂う少女の肢体に、男達の精液がぶっつけられる。

「あっ…あっ………」

ちんぽおっ…ちんぽ汁しゃべー、セーキありがびよっ…

ありあおほっ…じゃいまひゅうっ…いっぐ…うううっ…うううっ…

もっ何度も目かも分からない絶頂。

ぬるぬるになった小さな身体をくねらせ、男の精に包まれる幸せの。

「あんっ…あひ…っ…あ…が……」

「っあはあ…あん………は…あはあっ……」

ドロ…

壊れた神経回路が柔らかなラインで形作られた手足を激しく痙攣させ、少女の腰が跳ね上がる。

「おっ…んぽっ…ん……おほおっ」

白目を剥き、四肢をびくつかせ、シリ力は絶頂の極地を駆け続けた。



「あん……あ……えひ、えひひひ……」

「……おまんこジュースう……じよばじよがぁあ……へひひひ」

ドリンクサーバーの前には、少女の愛液に身を濡らした男達。その足元には現実世界ならありえないサイズの水滴りが出来ていた。

「お客しやまあー……シリカの、ロリまんこジュースをお

お求めによおお客しやまあー……おお、お待たしえれしゅうううう……」

だっしなく開いた唇からは淫語を垂れ流し

下半身のそれからは透明な液体が撒き散らされる。

ドロ……

「淫乱シリカのお……アクメ汁は、いかがれしゆかあ？」

「……あん……あつ……ら、ラブジュースう……」

「絞ってたの、ロリまんこジュースじゅうううう……えへ、えへへへへ」

緩んだ頬と濁った瞳。

シリカは幸せそうに微笑えんだ。



「ポールダンスは初めてなんだけど……えへへ」

挑発的なBGMに乗せて腰を振り、ポールに絡ませる均整の取れた四肢。

「後ろの人。ちゃんと見えてるかな？」

「もっと前の方に来て好きになように見て良いよー」

ポールに恥部を擦り付けるようにして股を開き、腰を突き出し、

スカートのその奥を晒す。

ブル

フリフリ

女の色香を撒き散らしながら、

ステンレス素材を模した銀色の棒を掴んでのセクスアピール。

「これじゃスカートの中丸見えだよー」

「もぉ……みんなエッチなんだから……」

微笑みながらゆっくりと舞台上を回り、

脱げかけた装備からチラつく肢体を男の一人一人に見せ付ける。

「はーい。それでは、**血盟騎士団副団長、閃光のアスナ。**

ストリップしまーすよ」



「えへへ、どうかな。リアルでは学校指定の水着くらいしか着たことなかったんだけど…」

「ちゃんとオナニーのおかげになってたら嬉しいなよ」

可愛らしい顔立ちに柔らかなライン、成熟過程の少女特有のあどけなさ。

そして、それらを押しつけるようにして存在感を示す際どい水着と、

どきつい女の色香。

ブル



肉付きの良い大腿部から緩やかなラインを描く腓腹筋、歪みつつ無い爪先。

その二つをポールに絡ませ、セックスアピールを見せ付ける。

「ちよっと大技に挑戦してみようかな。」

水着がズレちゃうかもじゃないけど、

うっかりおまんこ見えちゃったからってMCコールしちゃ

ダメだからねー」

「や……っあんっ……」

「あ……っんう……あぁ、これ……ポールとあそこが擦れて……」

「ちよっと気持ちいいかも……」

薄暗がりを取り取る照明の中で、汗ばんだ肌が扇情的に揺れる。いつの間にか汗以外の液体が少女の下半身、主に股の辺りを濡らし始め、水分を含んで半透明になった白い水着が肌に張り付いていた。



「んう……男の人に……見られながら……はぁ……」

「おまた……ニオリ付けてると……変態女って感じがして……」

「恥ずかしくて……はぁ……アソコが……濡れてきちゃったの……」

言葉を紡ぐ間にもアスナの腰は淫らに揺らめき、弓状に反らした胸の上で張りのある乳房がたゆんと弾む。

「もっと……もっと見て欲しいの……」

「私の……淫乱アスナのはしたない姿で……」

「あ……おちんちん……勃起させて欲しいのお……」

「えへへ、おっぱいもおまんこもおぜしんが、見えちゃうよお……」

ポリゴンデータにしても美しく淫靡なその肢体に、

客席の男達のそれがさらに硬度を増して行く。

「うん、良いよ……おちんちん擦って良いよ……」

はあ……私もおまんこでちゅくちゅするから……あん……一緒に、

オナニーしようっ」

少女の割れ目から零れた液体が、舞台の染みをさらに広げて行く。

「えへへ……あんっ……ああ……変態っ、変態なのお……」

アスナはあ……おちんぽの中で……はあ……

おまんこ露出して興奮しちゃっ、変態女なんですっ……」



「あはあつ、キたあつ、おちんぽ汁キたあつ。

うれしいれじゅう……ああん、セーエキどろどろだよお……

あ……はあ……えへへ……えへへへ……」

栗色の髪の毛から柔らかな乳房、白桃の尻まで濃厚な雄の精に包まれ、蕩けた痴女の顔でアスナが微笑む。

ドロン
ブルン

キーン
キーン

「えへへ、だってえ……こんなに……」

ああ……ドロドロのおちんぽ汁かけられたらあ……

誰だって……はあ、エッチなこと……頭が一杯になっちゃっよお……

あ、やあ……また……ああ……っ」

びちゃびちゃと音をたてて、少女の身体はどまでも汚れて行く。

「あんっあんっ……はあんっ……ああ……」

精液オナニーしゅっおい……

おまんこくりくりするの止まらないよお……っ」



「それじゃあ、ローションかけて行きまーす。

ちよっと冷たいかもおれないけど、我慢しててね」

「んふっ……」

「ん……」

「あんっ……動いちゃだめ。あなたは、ただ寝ていれば良いの」

「す、すみません」

「ふふ、女の子のカラダ……気持ちイイでしょ……」

ニ

さわ……

「いつもギルドに尽くしてくれてるから……」

私からの……お礼、です……はあ……カラダ中ぜんぜん

洗ってあげるからね……」

クリ



「どこか…痒い所、気になる所は、ありませんか？」

「ちゅ…うわ…副団長…」

「んふ、良いコね…そのままですよ」

「んっ…ふふ…今、ビクってしまいましたね」

ハ〜♡

「ゴゴが、気持ちいいんだ？」

「ココを触られると…あは、」

「またビクって…カワイイ」

スリ♡

スリ♡

「んっ♡」

クリ♡

クリ♡

さわ…♡



「ん……ちゅ……っ♡んう……ん、ちゅ……」

「あ……動いちゃ♡えろ……ダメですよお……」

「……えろれろれろれろれろれろれろれろれろれろ……ちろちろ……」

「べろお……じゅろ、」

「えろえろえろえろえろえろえろえろえろお……」

「……じゅお……」

「えろ♡」

「えろ♡」

「えろ♡」

「えろ♡」

「大の大人が……れろ……自分よりも、年下の女の子に……」

「おちんちん舐められて……こんなに……はあ……えろお……」

「びくびくさせちゃって……んふ、ダメな人ですね……」

「さわ……♡」



「ちゅ……んぶ……は……あん、動いひゃ、
らめですよお」

「あは……顔が真っ赤ですよお……」

「そんな……じゅるる……気持ちいいんだ」

「はあ……女の子に、おちんちん舐められて気持ちいいです、」

「口まぐでべろべろさせて……勃起ちんぽ、
びくびくさせてますっ……って……言っても良いのよ……」

「はあ……」

「はあ……」

「はあ……」

「我慢……しなくて良いよ……はあ……えろ……じゅるる……」

「えろれろお……あ……ん……もって、素直に……」

「べろ……っ……えろ……っ……じゅるる……」

「クリ」

「さわ……」



「ペろ……れろお……はあ、また……」

「おっきくなつてきましたね……じゅるう……」

「……私の口で……もっと、シて欲しいんでしょっつん。」

「……んふ、嘘付いてもだーめ！」

「おちんちんは……んなに……はあ……正直なんだからあ……」

ドロオ……

ハ……

じゅるる；

へろへろ

へろへろ

フ……
……えろ……
……ペろ……
……じゅるる……
……れろお……

あ……
……はあ……
……いよ……
……ん……

もっ……
……しよっ……

さわ……

クリ

クリ

「んもぉ」
牛の口から漏れる、牛らしい鳴き声。

大きな双丘を揺らぐ、栗色の美しい毛並みをもつそれは、
実に可愛らしい牝牛であった。

「よう、牛っ。今日も乳をもらいに来たぜ」

「んもぉ……んもぉ……」

軽く撫でてやる。牛は嬉しそうに頭をへりへりとする。寄せてきた。

別段スキンシップを取る必要は無いのだが、そこは単純に気分の問題だろっ。

「も……んもぉ……っ……んもぉおぉ……ふもぉ……」

牝牛と農家のおやじさんが腰をぶつけ合うのどかな風景を、微笑ましく眺める。

「も……おっ、おあん……もほお……ふも……おん……んもおん……」

牛っっは妙に艶っぽい啼き声。可愛がきんぐの顔。

「んもっ」

とっじまじだっどっう風に小首をかしげる牛。

その仕草にキモッさんは思わずにキリッとした。

ブムン

「カワイイな……」

「おっ、うちのアスナは街一番のべっぴんさんだてねえ……」

手塩にかけて育てた、最高の牝牛やで」

「ふも……おんっ
一段と重い挿入音。」

悦楽の色に蕩けて行く牛の顔を見ながら、
キモトさんは下半身が硬くなっているのを感じながら……
まいったな、獣姦癖なんてないのに……

「もお……んも……っもお……んもおっ……おん……
ふも……おっ……おん……

股を盛大に濡らしながら、牝牛が腰を振る。

牛乳一杯を得るためのこの待ち時間が苦痛になりながら、
キモトさんが暇を持て余して、おんがASINの乳首を舐める。

「もっ……
だらしない顔で腰を振る牝牛の姿は、

第二層で代わり映えのない生活を送るキモトさんにとって一種の清涼水であった。

「ブム……
畜舎小屋に響くレスト音がより重く、くもったものへと変わる。

「ふも……っおん、ふもおっ……もっ……ふもおっ……
」

食を満たす悦びの声を上げながら、
飼い主から与えられた飼料を臍壁で咀嚼する。

「んもお……ふんもおお……ふもお」

「おお、まだ足りんけ。」

ええぞおアスナ。ガッツリ食つてええ乳出すんやでえ」

「もっ……んお……ふも……んもお……いおうっ」

「んもお」

「よしよし、いいコだ。美味い乳をたのむぜ」

キモトさんが頭をなでてやると、牛は眼を細めて嬉しそうに腰を振った。

「もおお……もおん……ふもお……んもおっ」

半開きの口。緩んだ尻。

「これほど表情豊かな動物オプシエクトも珍しい。」

「何か本当に生きてるっぽいな、お前は」

涎が垂れる口元を指でなぞってやると

牝牛は舌を出してキモトさんの指をしゃぶりの始めた。

ブルン

「んもお……あっ……んちゅ……えろ……はあ……あ」

「んもお……ん……ちゅ……んちゅ……っ」

ドブ

「んほおおおおおおおおおおおお」

動物らしい盛大な絶頂。

同時に、搾乳器が取り付けられた乳房、その先端から白い液体が噴出す。

「おおー。出た出た。何度見てもすごいな」

紙パックでスーパーに並ぶ牛乳も、

こうして搾る所を見ていると、非常に感慨深いものである。

「んもおっ……おっ……あっ……ああんっ……あはあ……」

「んもおっ……おっ……あっ……ああんっ……あはあ……」

激しく痙攣しながら乳を噴く牝牛。

搾乳器の無機質な管を、生命溢れる母乳が流れて行く。

「あはあっ」

プジャー

腹側を挟む快感に涎を垂らし、牛の乳が飛沫を上げる。

「んおっ……おんいっ……あっ……ああん……」

「はあ、あんっ……あんっ……あんっ……ああん……ああん……ああん……」

ブルン

ブルル

ドプ

「これは……ちょっと、やばいかも……」

全身を触手に絡め取られ、シリカの身体は宙に浮いた状態だった。視界を埋める。ピンク色の肉鳶を前に、シリカは呻く。

くすぐったい上に気持ち悪い。

触手の表面にびっしりとささくれ立つ弾力のある肉棘はそれぞれが個々に蠢き、シリカの反応を確かめるように、全身をくまなく撫で回していた。

ル

グ

「ふ……んう……や……あふ……っ……あ……や……」

キ

ニムル

ニムル





そのショーツの中に肉蕪が滑り込み、シリカの口から甘い吐息が漏れた。
年の割りに肉付きの良い臀部を、触手が這い回る。

「いっ... あは... んく... はあ... あだめ...
んっ... 違っ... 違っのお... あん...
ああ... あ、そー... だめえ...」

「キッ... んっ... あ...」

ズン♡
ズン♡
ズン♡
ズン♡
ズン♡

ニョル♡
ニョル♡

♡
♡
♡
♡

ニョル♡



少女の小さな啗内へと触手が侵入して行く。

我に戻る間もなく舌を押し分け、咽頭手前まで征服。

あわてて歯を立てるものの、柔らかいくせに強靱な海綿体には意味を成さない。

顔を振つても触手は離れず、肉の棘がシリカの口内を撫で回す。

んんんんん

ガボッ

グッ♡

グッ♡

グッ♡

グッ♡

ニュルッ

ニュルッ

んんんんん
ニョル

んんんんん
げほっ
んんんんん
んんんんん

ズッ♡

ズッ♡

ズッ♡

キッ♡

キッ♡

キッ♡



「んお………んが……げほっ……いゆる……おえ……」

ドブ
がボ

んが
んが
んが

ニョル

ベクトルと重力演算に逆らうことなく、濃密な液体が体内へと流れていく。

「げほっ………んがっ………」

喉へと侵入した液体は反射的に嚥下され、

消化器官などないはずのシリカの仮想の身体へと染み込んで行った。

キ

ズ
ズ
ズ

「んぐ………ん………んう………」

ホットワインを飲んだような、じんわりとした感覚。

「ん………ん………んう………」

口を触手に塞がれたまま、シリカは筋力値の限りを以って
その身を痙攣させた。

ひくつく恥部から噴出した液体が、石畳に雨音を立てて染みを作る。

放たれた矢のごとく触手が走り、
表面にびっしりと生えた柔らかな肉の棘二つが
シリカの剥き出しの神経塊を弾き、少女は絶頂した。

言い様の無い情欲がシリカの中で膨れ上がり、そして……





「ん……けほっ……んはっ……はっ……はっ……はっ……はっ……」

「はっ……あはっ……っあ……っ……っ……」

ニムルッ

口から外気を取り込みつつ、犬のように舌を垂らす。

その瞳からは冒険者としての強さも意思も失われていた。

「あは……ちんぽお……おちんぽくらしやあい……」

濁った瞳、緩んだ眉。

心に浮かぶ言葉をそのままに、意味も考えずに口から垂れ流す。

「……あ……触手しゃんの……ぬりぬりおちんぽお……」

「シリカの、おまんこ……お願いします……」

ビクン

ゴッ

ズグ

ズグ

ズグ

ニムル……



「おほおほおほおほおほおほ」

ダラ

カ
カ
カ

カ
カ
カ

ニユル

ニユル...

脳髓を掻き巻る強烈な快感。

圧倒的な愉悦、その快樂電流に視界が白く塗りつぶされる。

少女の口と股から駄々漏れる女の涎が、その歓喜の声を代弁していた。

ト

ニユル

「おほおほ... おう... あ... かはっ... おはあっ」

ツ

ビク

ツッポ
ツッポ

ツッパ

ズ

ズ
ズ
ズ

ゴ

ゴ

キ

ガ
ガ



かつて男性プレイヤーに囲まれ、

愛らしい笑顔を浮かべていた少女のものとは思えない嬌声。

部屋の床が水浸しになってもなお、シリカは腰をふり続けていた。

「えへへ…触手しゃんはあ…はあ…」

シリカの、おまんこが大しゆきなんれしゆねえ…あはあ

「あは…シリカもお…触手しゃんのおちんぼが、

「あーいしゆきれしゆう…あんい…おちんぼしゆいよあ」

「はっ…はひ…つ…あはあつ…あうつ…あえあつ」

「…つああつ…」

ニョル

ニョル…

「あん…あん…おちんぼい…もつとお」

シリカのおまんこお…ぐちゅぐちゅいへえ…つあはあ

ズリ





「触手しゃんが満足するまでえ...好きなように、あんな
おまんこじゅぽじゅぽしてイイよお...えへえへえか
えへえへえか

ドロォ

ブル

グワ

ゴム

ゴム

ゴム

ジュポ

ジュポ

ズリ

ズリ

ズリ

あはあ...あ、アクメ汁、ですギちやうづづづづ
あはあ...あ、アクメ汁、ですギちやうづづづづ

あんそつ...おなかの、ほづ...あつあつ...イク...いじじ
あんそつ...おなかの、ほづ...あつあつ...イク...いじじ

フワ...イク...ミニマニにしへえ...あつ
フワ...イク...ミニマニにしへえ...あつ

あん...あつあつあつ...あ、そーお...
あん...あつあつあつ...あ、そーお...

あん...あちんぽすキー...
あん...あちんぽすキー...

ニムル

ニムル

「恥じらいが足りないねエースナ。」

僕としては、ストリップみたいになつてほしいと脱いで欲しかったんだがね」

「お互い暇ではないのですし、」

作業は手の取り早い方が良いんじゃないですか？」

ギョウ

ブルン

ブルン

「なるほど……せめてその尻を揺らすんだよ。」

「ふふ……その顔がたらしなく緩んでいく様を思うと、本当たまらないよ」



「あぁっ……っ……ん……あ……ぐぶぶ……っ……」

「いいねーその顔ーその表情ー!」

「愛する男のために!自らの身体を差し出し、涙を浮かべて屈辱に耐える高貴なる女騎士!」

「オンラインゲームのクエストとしては、

最高のシナリオだと思っんだが……

その「さっ」ってなんなのかなあ、血盟騎士団副団長殿?」

あぶっ

ブルン

びゅん

お

「……っ……っ……最低の……気分……決まってる、でっよ……っ」

ギョ

っ……



「あう……あふ……あ……あ……ああ……っ……」

はあ…………あ…………

視線を宙に漂わせながら、アスナは涎を垂らした。

「ずいぶんと大人しくなってきたんじゃないか。」

「ようやく僕のを受け入れてくれたのかなあ？」

「ち……ちが……うっ……あ……ああ……………」

「んん、おお……中がすこい事になってきたじゃないかアスナ。」

「このうねり、絡みつき、指先を嘗め回されているような気分だよ」

「あん……あ……言わないでえ……ああ……っ……ん……あ……あ……」





ぐんぐん ああああああああああああああ

「すごい絶頂だねえ。」

そんなに僕とのセックスが嬉しかったのかい？」

ブルンッ

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡ ビクッ ♡

パンッ

「……そ、そんなわけ……ない……でしょ……」

あんっ……あんっ……あんっ……あ

♡ ビクッ ♡

「あん、あ、やだ……」

もう、中っ……はあっ……あ……やだあ……あんっ……やだあっ……

♡♡♡♡♡

♡ ビクッ ♡

♡ パク ♡

♡ パク ♡

♡ ビクッ ♡

♡ ビクッ ♡

ブルンッ

ズン
ズン

ドロ

♡ パンッ ♡

♡ パンッ ♡



「良い声で啼いてくれるじゃないか。録音して全フレイヤー諸君に聞かせてやりたいくらいだよ!」

「あーっ……あえああう、あおうっ……っおほあっ」

「ああう……っ……あう……あうっ……」

「くひひひ。まるで獣みたいに鳴くじゃないか。」

「どうせなら牝犬に成り下がって、ワンでも吠えてみたらどうなんだいっ」

「……っ……ふ、ふいじゃええあえあはあああああっ」

「あん……あひ……あっ……あんっ……あんっ……あんっ……ああ……」

ビクンッ
ビクンッ

ビクンッ

ハクッ
ハクッ

ドロー

ズン
ズン
ズン

ブルンッ

ゴク
ゴク
ゴク

ガク
ガク



「……まったく、男の味を覚えた途端にこんな姿を晒すとは。閃光様も所詮は人間だったという事かね。今の君の姿を、キリト君にも見せてあげたいもんだよ」

「あんっ...あえ...あん、あひ...あん...ああっ...」

「あんっ...あ、あ、あ、あ...あんっ...あんっ...あんっ...あんっ...あんっ...ああ...あはあ...あはあ...」

パンッ

アッ

ブルンッ

ズンッ

ドロッ

ビクッ

ビクッ

ブル

ビクンッ

ビクンッ

ガク
ガク



「……まったく、男の味を覚えた途端にこんな姿を晒すとは。閃光様も所詮は人間だったという事かね。今の君の姿を、キリト君にも見せてあげたいもんだよ」

「あんっ……あえ……あん、あひ……あん……あぁっ……」

「あんっ……あ、あ、あ、あ……あんっ……あんっ……あぁっ……あぁんっ……あぁんっ……あぁ……あはぁ……あはぁ……」

パンッ

ビクッ

ブルン

ズン
ズン

ドロ

ビクッ

ピクン
ピクン

ブル

ピクン

ピクン

ガク
ガク

「……ふ、フルダイブシステムをこんな事のために利用して、人の形まで捨てるなんて……科学者として最低の行為よ。あなたは間違ってるわ」

キッ

ゴッゴッゴッ……

「この人外アバターを操作する試験だって、ヴァーチャルリアリティの発展には欠かせない研究の二つなんだよ」

「だっ、だからってそんな……」

「気色悪いモンスターを自分で操作するなんて……」

「この世界の身体は自分自身なのよ。お、おかしいとは思わないの？」

キョッ



「ぬ、濡れてなんか……あ……んっ」

「ふ……はあ……ぐ……う……」

「……」

「……」

「我慢しなくて良いんだよアスナ。捕らえられたお姫様は、悪者にその身を汚されてこそ輝くというものだ」

「だ、誰があなたなんか……」

「あ……はあ……んっ……」





「もつとだ。もつとこの屈辱に満ちた顔を見せてくれたまえ」

ふんふん...

んんん...

フー...

ニ...

ギョ...

ゴロ...

ハハ...

ハハ...

カ...

カ...

カ...

カ...

カ...

カ...

カ...

トロ〜

ニ...

「ひ..... あっ..... あっあっ..... んふう.....
ああはあ..... あんっ、 あんっ、 ああ..... やめっ、 やめて

「だめ..... あは、 はあっ..... はあっ.....

「ん..... ああ..... ああう.....」



「んおほおおおおおああああああああつっつっ」
「あん……あつ……あおつ……おぼつ……おぼほお……」

ビクッ

「……っ……イキましたーイキましたあーん」

「な、なんがいもお……イキまじだあつっっーも」

「許じて……ちゅちゅちゅちゅ……許して……へへへちゅちゅ……」

「……も、もう無理でしょ……これいよう……」

「おおおまん……おまん……壊れ……ちゅちゅちゅちゅ……」

ビクッ

ドブッ

ビクッ

トロ

ニョルルルル……

「もう許して……」
「ゴッ……」
「ポッ……」

「おほおほ……」
「おほおほ……」

クワッ
クワッ
クワッ
クワッ

クワッ
クワッ

クワッ
クワッ
クワッ
クワッ

ハッ
ハッ
ハッ
ハッ

ガッ
ガッ
ガッ
ガッ

「おほおほ……」
「おほおほ……」



「あひいっ... あん... あはあ... クリトリスユ...」
クリトリシユウウウンボッポッイイイ

「……悦んでくれるのは嬉しいけど、一人遊びは趣味じゃあないんだよね」

「えい... えいびつ... ちんぽお...」
触手おちんぽいゅぽいゅぽおおお... いびつ

「えい... えいびつ... ちんぽお...」
ウウン

「トク...」
トロ〜

「ドブン...」

「ドブン...」

「あん... あへてい...」
ぬりゅぬりゅおちんぽ...

「あん... あへてい...」
ぬりゅぬりゅおちんぽ...

「あん... あへてい...」
ぬりゅぬりゅおちんぽ...

「あん... あへてい...」
ぬりゅぬりゅおちんぽ...

「ゴリゴリ...」
ゴリゴリ

「ニムルルル...」
ニムルルル...



あんなー...あんなー...あんなー...
あんなー...あんなー...あんなー...
あんなー...あんなー...あんなー...
あんなー...あんなー...あんなー...
あんなー...あんなー...あんなー...

「アーン……カッ」

卑猥な音をたてながら、インゴットがリスベットの膣内へと飲み込まれていく。

「……あは、すげー。こんなに大きい始めてかも」

ブルン

ブルン

ゴリゴリ
ゴリゴリ

ジュッポ

ッポ

出来るだけ同じリズムで、丁寧にインゴットと自身の腰をぶつけ合う。

これだけ太くて遅しいインゴット……きつと素敵な武器になるに違いない。

「……んふっ……」

「……んふっ……」

何かがおかしいと思いはじめたのは、三百回ほど叩いた辺りからだ。

「……さんびやくはち……さんびやくキョウ……はあ……」

「さんびやくじゅう……さんびやくじゅういち……はあ……」

ブル

さすがに少し、かかりすぎではないだろうか。

ブル

ジュッポ

インゴットは汁に濡れ、灯りを反射するほどに輝いてはいるが、それでもインゴットのままであり武器と呼ぶには至っていない。

「はあ……さんびやくじゅうはち……」

「さんびやくじゅうきゅう……さんびやく……ろくじゅう……」

「な、なんで……あ……なんで武器に、ならないのよお……」



「あんっ……ん……あぁ……イイわよ……その調子……」

花屋が花に語りかけるように、飼育員が動物に声を掛けるように、リスベットは股下のインゴットに向けて笑顔で腰を振った。

「んふ……あんっ……すっぴい、インゴットちゃんぽ、気持ちイイよぉ」

心なだが、インゴットがより硬く反り返ったような気がする。

「んふふ……あたしの……あん、おまんこハンマー気持ちいい」

ブルンッ

ブルル

ゴリッゴリッ
ゴリッゴリッ

ジュッポ

ブッポ
ブッポ

ブッポ
ブッポ

ん……ん

んふふ

ジュッポ

ブッポ

ブッポ

ハハハ

ハハハ

んふふ



「あは、すとおい……こんならじのこっぴー……」
やはり素材に対して、語りかけることが重要だったのだ。
んふん

リズベットは音を立てて腰を打ち下ろした。
弾けた汁が金床を濡らす。

ブルルン

ブルン

キュウウウ

ムッポ
ゴリゴリ
ゴリゴリ

ジュッポ

プッポ
プッポ

「ねえ、気持ちいい？ リズベットのどすけべおまんこ気持ちいい？」
うん……うん……えへへ、そうだよね……気持ちいいよね。
インパクトおちんぼ……あん、こんなじ……ビンビンだもんね……あ……んふふ

「リズベットさんの、ああ……ドスケベおまんこ……
気持ちいいですって……もっと言ってえ……」

「それでは…第75層、フィールドボスの攻略会議を始めます」

出来る限り落ち着いた声で紡ぐ第二声。部屋中のプレイヤー達の視線が一斉に集まる。

逃げたくなる気持ちを抑え、アスナは平然の限りを尽くして見詰め返した。

「本今朝、偵察隊のメンバーがフィールドボスの所在ポイントを突き止めてくれました」

「…突進とグレスを組み合わせさせた典型的な動物型のようなです」



「ちょ、ちょっとか……」

尻を揉みしだく隣の男に、アスナは小さく抗議の声を上げた。

「いやあさすがは副団長様だ。その凛々しさととてもローター仕込んでるとは思えない」

ビクッ

モッ
モッ
ムッ
ムッ

「はあ……あ……」





「……こっ、攻撃の……バリエーションは、

豊富ではなさそうですが……っ……っ……モゴホン

ビク

キ

ゴッゴッ

グイイイ

羞恥と快感で震える声を、軽い咳払いでこまかす。

アスナは出来る限りいつも通りの声を意識しながら口を開いた。

「その分単純な攻撃に秀でていると思われますの……で、

決して、油断はしないでください」

「……っ」

ビク

グニッ

へっ……

「……あ……はあ……っ」

周囲に聞こえないように、快楽の余韻を唇から漏らす。

仕込まれたローターは乳首を元に位置座標を固定しているらしく、
どれだけ身をよじっても逃れることが出来ない。

「あんな風にシカトしちゃ、キリト君が可哀想なんじゃないのかな……
僕だったらきつと傷ついちゃうね」

「だ、誰のせい……こんな……はあ……ん……っ……」

漏れかけた甘い声を飲み込む。



部屋中の視線から逃げるように無言で須郷を睨み付け、胎内から湧き上がる快感に耐える。

「あまり黙りにくつていると、みんなに怪しまれちゃうよ」

軽く息を整え、恥ずかしさから卓上に落ちていた視界を、アスナは無理やり前方へと放り投げた。

「それから……「こんかいの……ていさつではあ……コホン」
「めんなさい……はあ……はあ……えと……その、復察では、
一段目のHPバーをろ割削る程度で引き返しましたが……」

「あ……はあ……あ……あはあ」



「……あ……はあん……あう……」

部屋中の視線から逃げるように無言で須郷を睨み付け、胎内から湧き上がる快感に耐える。

「あまり黙りにくつていると、みんなに怪しまれちゃうよ」

軽く息を整え、恥ずかしさから卓上に落ちていた視界をアスナは無理やり前方へと放り投げた。

「それから……こんかいの……ていさつではあ……コホン」

「めんなさい……はあ……はあ……えと……その、復察では、」

「段目のHPバーをろ割削る程度で引き返しましたが……」

「あ……はあ……あ……あはあ」

「グイッ」

「グググググ」

「モッモ」

「ビクッ」

「トロ」



「ず、すみません。ちよっと……はへへ……」
 情報……が、整理しきれていなく……その……モジ……
 もしもじと膝を擦り合わせながら、アスナは机に向かって弁解していた。

「はあ……はあ……はあ……あ……あ……」
 熱湯と冷水をかけられてひしやげた頭で、必死に言葉を探す。

「……えと、何らかのタイピングで、
 マズ型が出現すると思われますが……」

「あ……あ……あ……あ……あ……」



「アスナ様?」

グイグイ

ピン

ピク

グググ

キョウ

モゾモゾ

ノッ

ク...

グググ

グググ

グググ

グググ

グググ

グググ

「だ、大丈夫、
です。...ちよっと、
あん、あ...?」

「疲れ気味なりだけ、
ですからお...」

「し、しかし...」

「大丈夫...です...
...つ、つづけさせて...」

「はあ...
...ください...」

「しつれいしました...
...あ...はあ...
...はあ...ええと...」

「パーティー全体のお...
...っあん、あ...あ...」

「パーティーのお...
...構成はあ...」

「パーティーのお...
...構成はあ...」

「アッ

「アッ

トロ

ム

グググ

グググ

グググ

グググ

グググ

グググ

グググ

グググ



「無理をしちゃいけないな」

アスナの身体は須郷に抱き寄せられていた。
ロープで包み込むようにして、少女の蕩けた顔を隠す。

「キリト君のステータスはちゃんと上げておくから、安心してくれたまえ」

「……続けなきゃ……はあ」

「……続けたいとおかいぎを……」

会議……あん

モッモ

グググ
キ

ググググ

ロ...

フッ

「……あ……でもお」

ビク

ブル

ビク

グググ

ハア...

ハア...

「……え……あ……」

ハア...



「それともまだ、皆の前でローターに勝たれたいのかい？」

「それ...
そんなこと...
はい...
です。」

「それならさっさと退場して.....」

ブルブル

クワッ

グワッ

ハアハア...

ハア...

ウグウ...

クワッ...

アハハ...

グワッ

モッモッ

モッ

クワッ

クワッ

クワッ

クワッ

クワッ

クワッ

クワッ

クワッ

クワッ



「は……あ……はあ……あ……」

「乳首もガチガチに立っていますな」

騎士服の男が、アスナの胸で自己主張を続ける
桜色の突起を指先で叩いた。

キュンキュン

ゲゲゲ

くわっ

トロ

「んふ……あ……」

「……ローターを……仕込まれて……」

攻略……中なのに……感じてました……？」

「んん、聞こえないね。」

副団長らしく、大きな声を張って言うらしい。

「が、会議中に……はあ……ローター……で……」

感じてましたあ……」

「情報は具体的に述べたまえさ」

「あいつ……あ……はあ……す、すみませ……ぐりぐり……ああ……」

「んく……はあ……こ、攻略会議中に……リモコンローターで……」

身体中を……あ……い、弄られ、て……」

おまんこ、グシヨグシヨに濡らしてましたあ……」

ト

キューキュー

グググ

ぐりぐりぐり

ああ



「ほほお、ぬるぬるじゃないか…」

ロータープレイがずいぶんとお気に召していたようだね」

ビク

ゲゲゲ

おほおほ

おほおほ

ビク

「あー、違あう…の…そんなじゃ、
ない…です…」

「んん、何度も達してしまっただろうっ…こんな風に……」

「あーい……あーあ」

キューキュー

おほおほ

おほおほ

おほおほ

おほおほ

「あーんっ」

「cccc」

トロ



「はあ……はあ……はあ……あ……はあ……はあ……」

「そう残念そうな顔をしないでくれたまえ。そろそろ「イツが欲しいだろっ?」」

「さあ、足をもつと開いて……くひひ、準備万端じゃないか」

「ん……」
ビクッ
ビクッ

ビクッ
ケケケッ

キキキッ
ウウウッ

ビクッ

トロ



「あんっ……あ……あっ……あうけ……あはあ……ああ……あんっ」

ひと突きひと突きが重くのしかかり、性の隷属関係を明確に描く。

「アスナはヨを責められるのが好きだったね……っ」

「ああんっ」

ハ~~~~♡

キューキュー♡

キウウウ♡

トロ~~~~♡

「ひ……っ……あは……あんっ……あんっ……っ……」
ビクッ
ビクッ
パ……♡

ビクッ♡

ビクッ♡



「あはは、私もすっごくキレキレしてる……
好きな人に抱かれるのって、こんなに気持ちいいんだね……」

「動いてみて良いかな」

「うん……」

ブルン…

チュプ…

ブルン…

ニコッ



「あ〜ん……」

「うん」

「やめろ…お尻に挿れちやうど……」

「ん…ほんと？」

「さう言ってもらえろと…あ…嬉しいな…えへへ……」

ブレン…

チュブッ

ニブルンッ

ハッ…

ハッ…

ハッ…

「ちゅ……ん……はぁ……愛してるって、言って…

あ……愛してるって……ちゅ……はぁ……お願い……」

「……愛してる……。アスナ……好きだ……」

アスナを……愛してる……」

「私も……好き……あ……」

キリト君が大好き……」

あ……ふ……んちゅ……」

「アスナ……俺……」

「良いよ、キリト君……そのまま……あ、中に……」

中に……出して……」

「アスナ……」

ハァ……」

チュ

ビュッ

ブルンッ

ハイ……♡

「キリト君……キリト君……もっと愛して……」

私を……離さないで……」

「うん、良いよ……」

キリト君にこんなじ喜んでもらえて……」

すく喜びの……」

「でも、アスナは……」

ニコッ

ブルン…

チュブッ

ビュッ

ビュッ

ブルンッ

ハイ……♡

「私も……気持ち良かったよ。ありがとうキリト君……」



「ねえキリト君……愛してるって、もう一回言ってみ……」

「一度落ち着いちゃうと、結構恥ずかしいんだけど……」

「お願い……」

アスナがその言葉の通り、愛を強請るように顔を近づけて来る。

「お、おう……えと、あ、愛してる……」

「もう一回……」

「愛してる……」

「もう一回……」

「愛してる……」

「もう一回……」

「……」

「ん……ふふ……キリト君の寝顔を、

眺めていたのになーって思っ……えへへ……」

「えー……」

「これは今後のための訓練です。頑張っ……寝てください」

「……」

「……」

「君だけは……絶対に守ってみせる……」

「……うん、ありがとっ」

そう、この笑顔を守ってみせる。

今度こそ、絶対に。





「おほおっ♡♡♡
 「や……やめ……やめいええ……おっ……おっ……おっ……んほお……」

キリトが眠るその隣で、アスナは白目を剥いて涎を垂らしていた。

「……っ……おほおっ♡♡♡

「キ、キリヒよ……さん……た、助け……あっ……

あお……おほ……おほ……」

おっ
おぐ♡

おほ♡♡

あつ♡
おほ♡

あつ♡
おほ♡

「僕はねえ……アスナ……すこく……怒っているんだよ……？」

あつ……あつ……あつ……あつ……あつ……あつ……

ガクガク



「んほおおおおおおおっ」

末端神経の隅々まで満たす絶頂感に、アスナは涙を流して全身を痙攣させた。

呻き声を上げてシーツを掴み

「まだまだ終わらないよおっ」

ズンッ
ズンッ

あうーん

あうーん
あうーん
あうーん

ビュ

ビュ

ビュク

ゴツ

ゴツ

ガク

ドブ

ガク

ガク

ガク

ガク

ビーン

ビーン

んほ

んほ

んほ

んほ

んほ

フッ

フッ

ジュポ

ジュポ

フッ

フッ

んほ



「……ガキガキの、勃起ちんぽお……」

「どろゆるろろろろろ……あん……」

「エロおちまん……中出しアケメ……」

「じゅい……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

ドロオ……

ズンズン

「みなさん、私に何か用ですか?」

「い、いやあ…何か、珍しい装備だな…って思っ…」

「そ、そうそう、そんなに…その…カッコ良い装備?」

見たこと無いから、気になっちゃってさ」

しどろもどろに答えながらも、男達はシリカを中心に円を描いて囲んで行く。

ばつが悪さよりも、最高峰の装備を見たいという欲求が勝っているらしい。

「そんなに…私の装備が気に入りますか?」

「じゃ、じゃあ…ちよつとだけなら、

じっくり見ても良いですよ」



ピンク色の薄い生地を勃起した乳首が押し上げ、
胸にひっばられた分股間にくいこんで行く。

「うおおおおおー……っ」

「みるよあれ…土手が丸見えじゃないか……」

「ス、スクシヨ撮っても良いっすか？」

「はい、良いですよ」

「うおお、ありがとうございますー」

荒い鼻息と共に数人の男が記録結晶をオブジェクト化させる。

「最高だよシリカちゃん…もっと、もっとお尻見せて……っ」

「あん…もう……ふふ」

みんな撮りすぎですよ

あ

」

「お、おい…何か濡れてないか？」

「ちよ、シャッターチャンスっ」

男達がざわめき、一斉に恥部へと向けたフラッシュがたかれ、シリカの脳を白く染めた。

「へんふ…みんなすこい必死にシャッター切ってる……」

「足…もっと、開いちゃおつかなあ……」

「……」



「シ、シリカちゃん、その…股がめっちゃ見えてるけど…いいの、これっ」

「えへへ…別に、淫乱シリカの露出まんこが

見えちゃったからって…何も問題ないじゃないですか……

みなさんの目で…じっくり…見ちゃってください……」

「え、今なんて？」

「ろ、露出まん…ええっ？」

目と口を開けて驚く男達のその反応さえも心地良い。

「んふ…露出まん…ですよう…ほら…」

「たくさんの男の人に見られて…こんなに、濡れて…」



「びしょびしょになっちゃってるよシリカちゃん」

「もしかして、見られて興奮してるのっエロい気分になっちゃってるのっ」

「あん、もう…そんなエッチなコト、

言わないでくださいよう……… 恥ずかしくて、嬉しくて…

…女の子には…あ…よくあることなんですう………」

「んふ…みなさんがいろいろ見るからあ…

シリカのエロ乳首、ピンピンになっちゃったんですよう………」

「えへへへ、もっと…もっと見て…もっと撮影して………」

シリカの勃起乳首も…ぐしょ濡れおまんこもお………」

皆さんの目で…あ…犯してください………」



「んん、どうだいシリカちゃん。」

外でみんなの前でオナニーするのは…開放的で素晴らしいだろう」

「…あ…はい…あん、ああ…気持ち、いい、ですう…」

「露出オナニー…あふ…一人でするよりも…ずっと…ああ…」

「み、見えますかあ…おちんちん大好きなどすけばエロまんこと…」

「ビんビんの勃起クリトリスう………」

「ハァッ♡♡♡♡♡」

「ハァッ♡♡♡♡♡」

「クハ♡♡♡」

「クハ♡♡♡」

「ジュポッ」

「ジュポッ」

「胸だって…今はまだ小さいけど……」

「あん…乳首は…んなに…ああ…敏感、なんですすよお…」

「シリカちゃんて意外と変態だったんだね。そんな「ト」も可愛いよ…ぐんぐん」

「えへへ…変態…変態ですう…シリカはあ……」

「あ…街中で…みんなの前で…オナニーしちゃう……」

「はあ…どすけば変態女なんですう……あはあっ……あ……」





「あんっ……あんっ……あんっ……あはあ……っ……あん
（ああん……ああん……）

「外でいくの気になったみたいだねシリカちゃん。中がまだ動いているよ」

「あん……だっ……露出アクメ……のはあ、すっ……ぎて……」

「おちんぼまだ……離したくないんです……」

「ハアッ……」

「ぐわ……ぐわ……ぐわ……」

「ああ……すっ……い……おじさんたちの勃起ちんぽ……
びんびんに反り返って……私も……おまんこ疼いてきちゃっ……」

「あんっ……もっと……もっと見て……」

「変態シリカのロリまんこもっと見てえ……」

「中年ちんぽくわえっばなしの、どすけおまんこ……っ……ああい……」

「がわがわ」

「フッ……」

「ジュポッ」

「ジュポッ」

「♡♡♡」

「ピクッ」



「シリカちゃんが頑張ったおかげで、たくさん経験値もらえたね」

あん... こんないっぱいっの嬉しいです
えへへ... おちんぼ経験値...

あへえあ... はく... あ... ああ... ああ...
あう... んう... あっ... あっ... の... ああ...

ドブウ

ドビュ

クム
クム
クム

クム

プン

ジュポッ

ジュポッ

かか
か

「ん……えへへ……おちんぼ経験値……あん……」

「こないっぽい……嬉しい、ですう……」

「いやあ、良かったよシリカちゃん」

「経験値とかは良く分からないけど、満足してくれたなら俺らも嬉しいよね」

「あん……もっとうすよう……」

「え？」

「まだまだ……精液足りないんです……もっともっと……」

「レベル上げしないと……はあ……また、置いていかれちゃうんです……」

「えっレベル？」

「アッ」

「……うお……」
「萎えていたはずの下半身が、シリカの微笑みとともに再び逞しさを取り戻す。
「ふふ……夜までずっと、精液ドロドロして……
シリカのレベルが、はあ……付合って、もらいますよ……」

「だから、今日はあ……おちんぼ玉が、
空っぽになるまで……ザーメン出して……
くださいなえ」

「……うお……」

「……変わった形の便器だな」

「2年ほど“トイレ”に触れていないせいでどう覚えてはいるが、

自由ごう

便器というものは、もう少しシンプルな作りではなかっただろうか。

概ねの形はあっているのだが、細部にどこが引っかかりを覚える。

自由こ

便器

肉壺

OK
Fuck me!!

北

穴あり

正正正
正正正
正正正

おチンポ
大好モ

「うーん、こんなだったかなー……」

まるで便器の穴から女の子の尻が突き出ているような、そんな違和感。

肉便器

中出し
ONLY

肉棒

Sex
中

毒

専用
女女上等

孕ませ

正正正
正正正

「……変わった形の便器だな」

「2年ほど“トイレ”に触れていなければどうも覚えてはあゐるが、



便器というものは、もう少しシンプルな作りではなかっただろうか。

概ねの形はあっているのだが、細部に「こ」が引っかかりを覚える。

「うーん、こんなだったかな……」

まるで便器の穴から女の子の尻が突き出ているような、そんな違和感。



「こんにちは、当肉便器をご利用いただき、

ありがとうございます。ついでに

おっぱいも

ありがとうございます。初めてのの方は、おっぱいも

それ以外の方は、2、を押してください。大

赤いフレアスカートをまくった

尻から見えるアナルが流れ、

タカ子さんはとりあえず左の尻肉：1をタップした。

肉中ON

専用女女上等

肉壺 OK Lock me!!

正正正正正

おちんちんが勃起しましたら、

「まず、服を脱いでくださいの。続いて取り出したおちんちんを

勃起させてください」

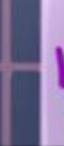
「おちんちんが勃起しましたら、

ぐしよ濡れの肉便器まんこにすっぽりハマて、

尿意を催すまで腰を振ってください

おちんちん

おちんちん



「こんにちは、当肉便器をご利用いただき、

ありがとうございます。」

初めての方は、**くび**、を：

それ以外の方は、**2**、を押してください。

赤いフレアスカートをまくった

尻から明るいアナウンスが流れ、

タカシさんはとりあえず左の尻肉**：1**をタップした。

キュン



「まず、服を脱いでください。続いて取り出したおちんちんを

勃起させてください。」

「おちんちんが勃起したら、

ぐしょ濡れの肉便器まんこにずっぽりハマて、

尿意を催すまで腰を振ってください。」

キュン

く

挿入されましたら……どうぞご自由。
腰を振ってください……
温かい。
便器との結合部が、腰を動かす度にじんわりと温かくなっていく。
暖房機能まで再現しているとは、
デザイナーもなかなか分かっているではないか。



「どうです、久々のトイレは」
「いやあ、良いですね。」
向こうでは面倒だなー
くらくらしか思っていますけどが

「あんの……あんの……あんの……」
「あんの……あんの……あんの……」
「あんの……あんの……あんの……」

「で、挿入されましたら……どっぞたい自由、

腰を振ってください……」

温かい。

便器との結合部が、腰を動かす度にじんわりと温かくなってくる。暖房機能まで再現しているとは、

デザイナーもなかなか分かっているではないか。

ポポポ

ポタポタ

キュン

アッ

アッ

アッ

ポ

トロ

「どつです、久々のトイレは」

「いやあ、良いですね。」

「向こうでは面倒だな」

「くらっ」が思っていますけど」

「あんの……あんの……あんの……はあ……あんの……あんの……」

「あんの……あんの……あんの……んふ……んふ……んふ……んあんの……」



「あぁ…何度でも…おしっこゲームン…どひゅどひゅしてえ…」

「あぁ…あぁいいわ…勃起ちんぽ空っぽになるまで…」

「あぁ…肉壺便器、あん…もつと突いて…」

「あぁ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…」

「あぁ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…」

「あぁ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…」

「あぁ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…」

「あぁ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…」

「あぁ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…」

「あぁ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…おまんぼ…」

肉壺
中
OK
Fuck me!!
ポ
ビュッ
ピクン
ピクン

ONLY
肉壺
中
ポ
ピクン
ピクン



「あんっ…何度でも…おしこぎゲームン…どひゅどひゅしてえ…」

「あんっ…ああいっわ…勃起ちんぽ空っぽになるまで…」

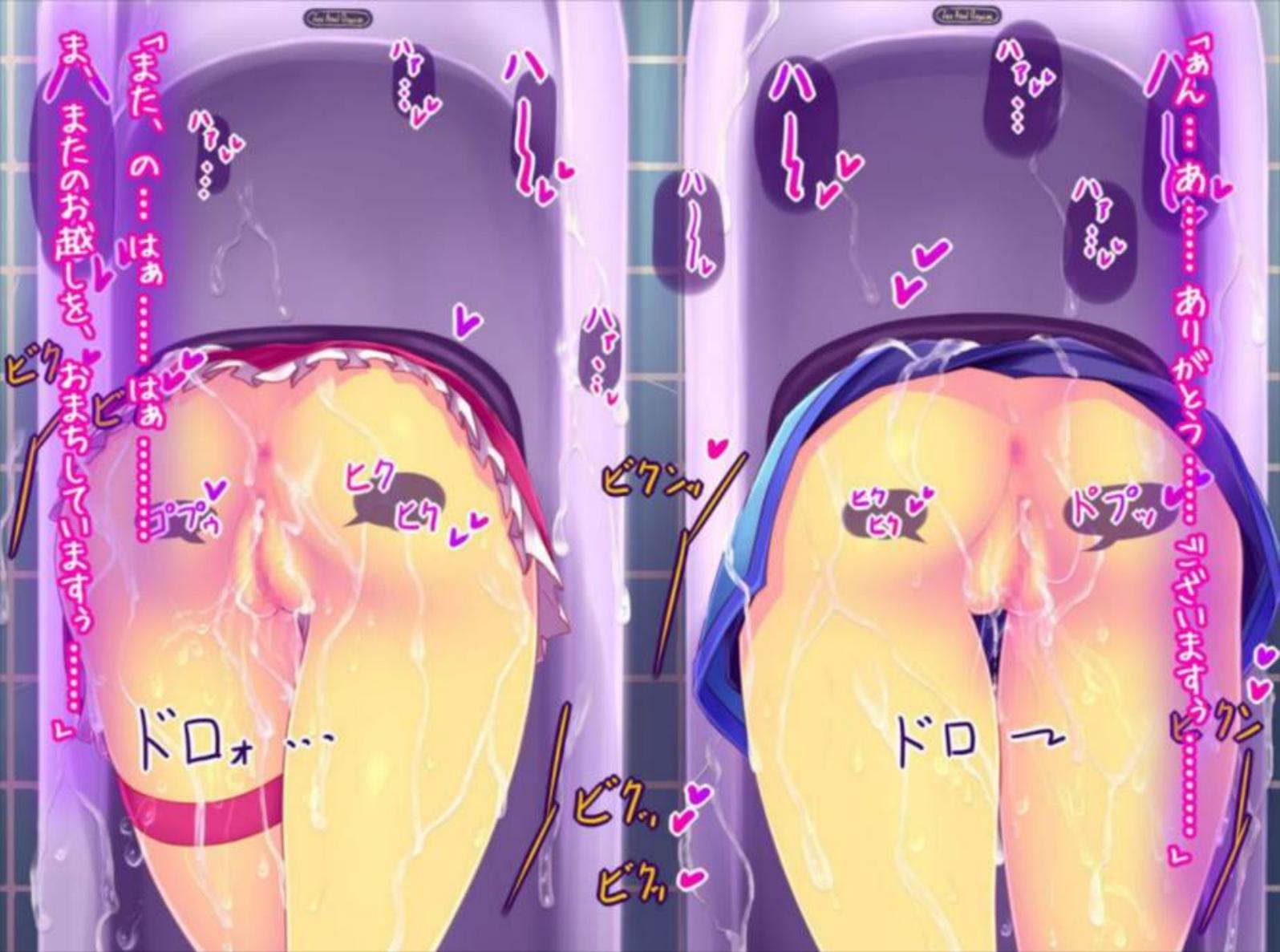
「あ…肉壺便器…」

「あ…おまんこ…おまんこ…おまんこ…」

「あ…おまんこ…おまんこ…おまんこ…」

「あ…おまんこ…おまんこ…おまんこ…」







「……あ……んちゅ……ちゅ……はあ……あ……

えろ……っ……はあ……べろお……

「んちゅ……だって……須郷さんが……っ……

んぶうっ……んむ……んうう……

「んふん、新妻アスナ。

今この場では名前ではなく『アナタ』と呼んでくれたまえ」

ぐわっ

ぐわぐわぐわ

トロー

「んう……ぶは……けほ……はあ……はあ……

ア、アナタが……わらむに……ちゅ……

「こんな……はあ……いやらしい道具……ハメたから……」

「……あ……誰とも、セックス……出来なくてえ……」

えろお……じゅうろ……はあ……辛かった……ですう……

えろお……じゅうろ……じゅうろ……えろ……ぺろ……あはあ……」

「くひひ、また浮気でもされたらたまらないからねえ。

すまなかつたね、アスナ」

「そ、そっと思っつなら……ぺろ……早く……

ん……外して、ください……」

コス

ニギッ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

グググググ

ググググ

トロ

「そうだね、早く外して僕とのセックスを思っ存分楽しみたいよね」

「ん……ちゅ……アナタと、したいわけじゃ……」

あふ……ん……じゅうろ……」

「あんの……あつ……やだ……ん……ちゅ……」

「こんな……ところでえ……はむ……んっ……」

「蹲踞の姿勢を取るアスナの股下で、淫らな水溜りが広がって行く。」

「くひひ、キリト君の部屋でおもらしとは……もはや彼に顔向けできないねえ」

「はあ……あつあつ……あん……ああ……べろお……えろお……」

「はあ……あつあつ……あんの……ああ……べろお……えろお……」



「場所を変えようか。僕の部屋で君の喜びそうな用意が整っている。

このままついて来てくれるとありがたいが…

そこはアスナの意思にまかせよう」

「私は……ん……はあ……」

同意も拒否も示せないまま、アスナの心が恋と淫欲の間で揺れ動く。

答えの出ない少女に、須郷は唇の端を吊り上げた。

「キリト君に強くなつて欲しいなら…

彼のためを思うなら、僕についてきたまえ」



ビュッ
グググググ
トロ
ピキ
ピキ

ドロォ

ビュッ

「くひひ、僕と一緒に来てくれるねっ」

「……は……」



「あんっ……もう……んふ……アスナさんがもたもたしてるから、
おじさん達がザーメン出しちゃったじゃないですかあ……」
「せっかく中出ししてもらおうと思っただのに……勿体無いですよねっ」

「アスナさんが素直になってくれば……」

おじさん達のおちんぽ汁、せーんぶ、

おまんこの中にどびゅどびゅして、してもらえろんですよ……」

「んふ……想像、してみてください……」

「柔らかいひだひだが……ちゅぶ……ちゅぶ……って掻き分けられて、
とろとろのオナホまんこ……ん……」

おじさんの「極太おちんぽ……ずっぽりハマられて……」

ドビュウ

ドビュウ

グググググ

ググググ

ド

んふ
フー
んふ

んふ
フー
んふ



「あんっ……もう……んふ……アスナさんがもたもたしてるから、
おじさん達がザーメン出しちゃったじゃないですかあ……」
「せっかく中出ししてもらおうと思っただに……勿体無いですよねっ」

「アスナさんが素直になってくれば……」
「おじさん達のおちんぼ汁、せーくんぶ、
おまんこの中にどびゅどびゅして、
してもらえろんですよー……」

「んふ……想像、
してみてくださいさい……」

「柔らかいひだひだが……ちゅぶ……ちゅぶ……
って掻き分けられて、
とろとろのオチホまんこ……ん……」

「おじさんの……極太おちんぼ……ずっぽりハマられて……」

「ドビ……」

「ん……」



「ぐんぐん……ふんぐん……うんぐん……」
「ふふ……また、イっちゃいましたね……」

「でも……まだまだ……満足していませんよね……生のおちんぽで、
中出しアクメしないと……マングクできない身体なんですよね……」

「おっちゃん達もお……オナニじゃ足りないみたいなんですよ……」
みんな、アスナさんを犯したいって……アスナさんのおまんこに
中出ししたいって……おちんちんおっきくしてるんです……」
「ふふ……感じますよね、
おっちゃん達のいやらしい視線……アスナさんの、
バイブくおえたままのエロまんこ……じっくり見られていますよね……」

「おっちゃん達のおまんこ……アスナさんの、
バイブくおえたままのエロまんこ……じっくり見られていますよね……」
「おっちゃん達のおまんこ……アスナさんの、
バイブくおえたままのエロまんこ……じっくり見られていますよね……」



「はぁ……あ……ん……じゅる……あ……はぁ……んく……
おちゃんと答えないと、おちんぽはもらえませんがよ」
ビクン
ビクン

「……はぁ……あ……
お、お……ぽ……欲しい……です……
「ぼってりちんぽと、勃起ちんぽ……どちらが欲しいんですか？」
「りよ、両方……お、おじ様の……」
「極大ぼってりおちんぽも……逞しい……ビクン……」

「あ……勃起おちんぽも……両方……欲しい……ですうっ……
トビュッ
トビュッ

ガガガガガ

ドビュウ

トコ



「はぁ……あ……ん……じゅる……あ……はぁ……ん……
「おちゃんと答えないと、おちんぼはもらえませんかよ」

「はぁ……あ……ん……じゅる……あ……はぁ……ん……
「はぁ……あ……ん……じゅる……あ……はぁ……ん……



「おじ様の、おちんぽで...アスナの Ero まんこ、犯して欲しいんです...」

「バイナでイっても...おまんこ汁、止まらないんです...生ちんぽじゃないと...駄目なんです...」

「どっか...おちんぽ無しじゃ生キられない...肉棒中毒の淫乱アスナに...おじ様ちんぽ恵んでください...」

「...ふ、大きくて嬉しい、おじ様ちんぽで...トロトロの肉壺まんこ、ずっぽりハマられて...ああ...壊れるくらいに...シユホシユホして欲しいんです...」

「おじ様の...熱い、おちんぽ汁で...ああ...ダメまんこ...」

ビクンッ♡
ビクンッ♡

ドビュウ

グググググ

ググググ

ト

グググ



「おじ様の、おちんぼで……アスナの Ero まんこ、犯して欲しいんです……」

「バイナでイっても……おまんこ汁、止まらないんです……」

「生ちんぼじゃないと……駄目なんです……」

「どっか……おちんぼ無しじゃ生キられない……」

「肉棒中毒の淫乱アスナに……おじ様ちんぼ恵んでください……」

「……ふ、大きくて嬉しい、おじ様ちんぼで……」

「トロトロの肉壺まんこ、ずっぽりハマられて……ああ……」

「壊れるくらいに……シユホシユホして欲しいんです……」

「おじ様の……熱い、おちんぼ汁で……ああ……ダメまんこ……」

「っぱいにされて……はあ……中出しアケメ、したいのお……」

ビクンッ♡
ビクンッ♡

お



「はあむっ……んぶ……んっんっ……ぶは……じゅる……」

「あちんぽっ……あ……おちんぽっ……んむ……」

「えろ……えろ……じゅずず……んぐ……ああ……」

「は……」

「あむ……はむ……べろ……じゅるるるる……ぶあ……あちんぽ……」

「こんなに、たくさん……あ……す……べろ、れろれろれろ……」

「ははは、恐ろしいくらいに勢いですな。」

「餓えた犬でさえ……」まではなりますまい……んっんっ」

「……ああんっ……あっ……ちんぽイイ……あむ……」

「ああっ、はあっ……んう……じゅるるう……あはあ……」

「ああイイ……んっ……べろ……じゅるる……」

「んっんっ……」

「んっんっ……」

「んっんっ……」

「んっんっ……」

「んっんっ……」

「んっんっ……」

「んっんっ……」



「あ…あ…あん…………… あ好きー… おちんぽ… 大好きれしゅう…
 おまんこ… フニョフニョ… ああもっ… ハー… ハー…
 あっ… あっ… あっ… あはあ…
 は… は… は…
 えへ… えへ…
 ズ… ズ… ズ…

「ぐひひ… これは大した淫乱っぷりだ。れろれろれろ
 れろれろ
 見ず知らずの男を受け入れてしまうなんて、肉棒中毒にも程があるねえ」

「あんっ… 淫乱、淫乱ですう… 肉棒中毒の淫乱アスナは…
 おちんちんくわえていないと… 生きていけないんですう…
 ズ… ズ… ズ…
 ドビュッ… ドビュッ… ドビュッ…
 アイっ… 気持ちいい… ですう… ああす… アイっ… 気持ちいい…
 駄目まん… 気持ちいい、 駄目まん… 気持ちいいいいっ…
 ト… ト… ト…



「はぁ…あん、ソコ…もっ…あぁ…そう…

「にりゅにりゅして…おちんぼの先っぽで…」

「あぁ、おちんぼ…勃起チンポもっ…あぁ…」

「は、い…嬉しい…嬉しいです…エッチな乳首」

「おじ様の指でくりくりされて、あん…」

「勃起チンポ…えろ…しゃぶって…」

「あぁ…」

「あぁ…」

「あぁ…」

「あぁ…」

「あぁ…」

「あぁ…」

「あぁ…」

「あぁ…」

「あぁ…」

「あはぁ…いき…いき…

「中年ちゃんぽに囲まれて…どすけべおまんこイカされますっ」

「あぁ…」



「あんっ、だっでえ...」こんなに、何回も...中出しアクメ、

させられたらあ...女の子なら誰だって...

べろお...おちんぽ中毒に、なっちゃいますよお...

「あはあっ...あん、ああっ...そこ...イッ...もっとなきへ上げて

...っああいっ、ドスケベおまんこ

どすけべおまんこもっといっぽいっぽしてえ...

ギョッ

グワッ

ドビュッ

ビクンッ

ハッ

あッ

ハッ

はあ...

ああん...

ああ...

おちんぽ...

おちんぽもっとお...

ビクンッ

ゴリッ

ドプロッ

ズンッ

ズンッ

REC

1000
0fps

192

「お久しぶりですおじ様。」

「こうして会えて、すごく嬉しいです。」

「えへへ……今日はいい、レベリングがしちやいますよ。」

18:37:20

映像の中で、二人の少女が微笑んでいた。

A

「久しぶりなものも、ついこの前したばかりじゃないか。」

「まったく、君達はどいまでも食欲だねえ……。」

男の声。しかも若くない中年男の声。



「おじ様達も、おちんぽびんびんで辛いですよね。」

「遠慮せずに、私のオナホまんこでスッキリして行ってください。」

「ふふふ、また病院を抜け出してきてしまったのかい？」

「いけないコだねアスナ君。君はまだリハビリ中だろう？」

「だってあっちの身体じゃ、まだセックスしてもらえないんだもん。」

「ふふ…おじ様ちんぽが恋しくて、抜け出してきちゃいました。」

「シリカちゃんもダメじゃないか。病院で休んでいないと」

「でも、私は攻略組みですから。」

「レベリングを怠るわけにはいきません。」

「もっともっとしべれを上げて、強くならなにとけなさんです。」





「んふ…ね。…はあ…わかる、でしょい…」

「二日もおちんちんもらえてなくて…おまんこでしよ濡れなの…」

「病院で経験値を集めよつとすると、おは」

「看護婦さんに止められちゃつので…んふ…おじさん達が、」

「付き合ってくださいね…」

「まだ君の体力は回復していないじゃないか。無理をさせるわけにはいかないよ」

「はー」

くはあ…
トロ…

「でも…このちの世界なら、良んですよね…」

「おじ様達もお…おたしを犯したいから…はあ…」

「にに、来てくれたんですよね…」

「ああ、きた……っは……あ……んっ……あ……」

「これ……これが欲しかったの……」

「ね……おじ様……いつもみたいに……」

「気持ちいいゴロゴロ……失っぽでゴロゴロ……」

あの頃の凛とした姿からは想像も出来ない、甘いおねだり。

中年男がアスナを抱き寄せた。

「んん、いいだろう。腰を反らせたまえ」

嬉しそうに微笑みながらアスナの身体が男の言う通りに仰け反り、男をくわえたままの恥部を掲げて見せる。

「あん……ああ……今の、もおいっかいい……」

「おちんちんの失っぽで……アクメポイントずんずんしてえ……」



「こっち見ちゃダメ……」

「こっぴつ……けこつ、恥ずかしいんだから……」

「あつ……ふふ、今ビクッてなった……お兄ちゃん……あたしの手、気持ちイイ？」

「コス♡」

「……」

「気持ち良くなっていいよお兄ちゃん……」

「アスナさんのことは残念だけど……」

「でも……ココ、こんなになってるし……我慢しなくて良いよ……」

「んふ……はあ……このまま……」

「出していいよ……はあ、あたしの手で……イっていいよ……」

「ギ」

「はあ……あ……お兄ちゃんの、精液……ん……」

「アス……」

「す、スグ……っ？」

「えへへ……おいしいよ、お兄ちゃん」

「あたしね……嬉しかったの……本当のゴドを知って、お兄ちゃんが帰ってきてくれて……もう我慢しなくて良いんだって……」

「……アスナさんのことは忘れなくてもいいの。」

「それでも……これからは……あたしが側にいて、お兄ちゃんの心を……満たしてあげる……」

「ギ……」



コス♡

コス♡

コス♡

ドロォ…



「あ……あは……んう……入ったよ……お兄ちゃん……」

ハッ……♡

「……あ……」

グリン♡

チュプ…

「あん……ふふ……お兄ちゃんは動かなくて良いよ……」

ハッ……♡

あたしが、お兄ちゃんを……はあ……癒して、あげる……」

「ね……どっかな……あたしの中……」

♡

はあ……ちゃんと……あ、気持ちよくなって……くれてる……？」

グリン♡



「あ……は……
お兄ちゃん……ごんなに、いっぱい……はあ……あ……
「はあ……はあ……スグ……」

「スグ……ごめん、俺一人で盛り上がっちゃったかも……」
「……そんなことないよ、あたしもすごい感じちゃった……えへへ」

ん……♡♡♡

トビ

チュプ……

グリ♡♡

「あは…おじさんのおちんぽ…あむ、おっききゅぎて…
はあ…あたみのおっぱいでも…包めないよ………」

「直葉ちゃんに『う』してもらうのは久しぶりだからね。」

「NPCも悪くはないけど、直葉ちゃんに『う』してもらうのが『番だね』」

ムニイ

ハハハ

知知

モニユ

ホロホ

「あん、おじちゃん……ゲーム内でのリアルネームは、
えろ、マナー違反でふよお………」

「ああ、ひゅひゅ……おちんぽびくびく……はあ……らみて……」

「おちんぽ汁……リーファのおくちまんこ……どひゅどひゅしへえっ」

グ



「おじさんのおちんぽ汁……いっぱい……お兄ちゃんのおちんぽ汁……」

んく……あ……かぶっ……んっ……んっ……

「お兄ちゃんのおちんぽ汁……あ……あ……」

んく……んく……んく……んく……

んく……んく……んく……んく……

んく……んく……

んく……んく……んく……んく……

モニョ

んく……んく……んく……んく……

「あ……」

「おや……本当に濡れているね……」

「こんなに透けてたら、パンツをはいている意味がないじゃないか」

「シヨーツに出来た溝を上から下へ、」

「下から上へと指で辿り中年男は唇を歪めた。」

「あん……もう……焦らなすぎて……」

「おじさんちんぽ……早く……」

「キ……キ……」

♡♡

トロツ

胸と同時に成長した臀部を掲げ、左右に振り、リーファが男の欲望を煽る。

「これはたまらんね……おじさんも、もう我慢できないよ……」

「でも、まだ満足してないんだよねっ」

「ん……はあ……ふふ、おじさんはあたしの身体のこと……」

「何でも知ってるんだね……」

「そりゃあ2年の付き合いだからね……お尻を見れば分かるよ」

「そ……は願って言ってよね」

「ははは、すまないね」

「ふ……と顔を膨らませ、すぐに猫なで声に戻る。」

「ね、おじさん……」

「キュ」

「キュ」

「トロッ」

「リーファが少しだけ腰を下げ、男女共通の穴を差し出す。」

「ああ、分かっていると……」



アーン アーン アーン

アーン アーン アーン
アーン アーン アーン
アーン アーン アーン

アーン アーン アーン
アーン アーン アーン

アーン アーン アーン
アーン アーン アーン
アーン アーン アーン

アーン アーン アーン
アーン アーン アーン
アーン アーン アーン

アーン アーン アーン
アーン アーン アーン
アーン アーン アーン

アーン アーン アーン
アーン アーン アーン
アーン アーン アーン

アーン アーン アーン
アーン アーン アーン
アーン アーン アーン

アーン アーン アーン
アーン アーン アーン
アーン アーン アーン

アーン アーン アーン
アーン アーン アーン
アーン アーン アーン

アーン アーン アーン
アーン アーン アーン
アーン アーン アーン

アーン アーン

アーン アーン

アーン アーン

アーン アーン

アーン アーン



「どうかなアスナ。僕のお嫁さんになれて幸せかな？」

「はい……あ……須郷さんのお嫁さんになれて……」

「……ああ……幸せ……幸せですう……」

「……だ、だから……お願い……します……もっと……」

「おちんぼ……ください……須郷さんの、花婿ちんぼで……」

「もっと……いっぱい……アスナの、エロまんこ……ピかせてください……」

「……あ……あ……あ……あ……ちんぼ……ちんぼすき……」

「……あ……あ……あ……あ……ちんぼ……ちんぼすき……」

「……あ……あ……あ……あ……ちんぼ……ちんぼすき……」

「ビクン」

「ダブン」

「ビクン」

「ダブン」

「ビクン」

「ダブン」

「ビクン」

「ダブン」

「ビクン」

「ダブン」

